
死神と人間

休憩所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と人間

【NZコード】

N8602M

【作者名】

休憩所

【あらすじ】

男は死を畏れぬ、『人形』のようで『死人』のような人間であった。

ひとりの男の、笑えぬ喜劇のお話。

男がいた。

何もない、ただ荒れているだけの荒野にその男はいた。

ただ一点を見つめ、呪つようにあることは祈るように、あることは願つようによかに斯つようにな。

その男には表情といつものが感じられない。

否。

表情のみならある。

笑顔だ。

しかし、その笑みは嘲つてゐるようにも至極幸せそうにもあることは微笑んでいるようにも取れる笑みだった。

しかしそのどの種類の笑みにもあの笑みは属さないだらう。
まるで異質。

死人のようであり、賢者のようにも、またはなんてことないただの人のような。

とにかく異質、いや、遺失であった。

「どうもまるでないかのよう」に、男はその場にたたずんでいた。

わたしは、彼を恐れた。人間ではない、寧ろ人間より高貴なわたしが人間である彼を畏怖したのだ。

寒氣もしたし、動悸が激しい。

次の日。

同じ場所に男はたたずんでいた。

やはり、彼の周りだけ空気が違つ氣がする。

——君子危うきに近づかず。

されど、悲しい動物の性か。

わたしは彼と話がしたかった。

何を感じ、何を思い、如何なる育ち方をすればこんな「人形」のようでは「死人」のような人間になるのだろうと。

——興味を持つてしまった。

『男、』

彼はわたしの「H」にも動じず淡々と返してきた。

「ああ、死神、昨夜から覗いていたかと思えば今度はなんだ。」

死を纏い、死へ誘う我らを畏れぬ生き物など初めてだつた。

『男、我ヲナゼ恐レヌ、畏レヌ』

男はなんともなしに、嗚呼例えれば地球は丸いか四角かと問われた時のようになりますとんとした後に、

「恐れなればならない理由がない。もちろん、畏れる理由もない。」

死を恐れぬ人間は見たことがある。

しかし、畏れない人間など、まして理由がないなどと言つ輩など…

「死神、俺を、連れていくのか。」

淡々と…表情もなく、わたしが恐れたあの「笑み」で男はこちらに笑んだ。

『……逝カヌ。 男、貴様ハ マダ』

まだ、死なないはずだ。

男の寿命を告げる、砂時計はまだまだ余裕がある。「まだ、か。
ならば、何時か俺は、そちらに逝けるのか。」

それは質問のような響きであつたが、決して質問ではなかつた。

ならばわたしの応えは、

『……分カラヌ、男、何故死ヲ畏レヌ』

男の魂はもはやわたしの知る冥府の底よりも深く、濃い漆黒に染まつてゐる。

男が死を畏れぬ限り、冥府には来れまい。

「言つただろう。死を畏れる理由がない。嗚呼違うな。生を尊いと感じていると言つた方が正しいか。」

尊い、と。

『ナラバ尚ノコト。生ト死ハ離セヌ。生ヲ尊イト感ジルナラバ死
ヲ畏レルハズダ。』

「……ある、男がいた。どこにでもある悲劇だ。いや、喜劇かな。
」

男は唐突に話はじめた。

「男には、妻がいた。娘と息子もいた。幸せ、だつた。春の木漏れ日のように柔らかで暖かな日々。男は生を楽しんだ。しかし、ある日・・・娘が死んだ。突然だ。息子も、亡くなり男は・・・死を憎み、嘆き、・・・恐れた。」

「男には妻と、家族と過ごした家だけ残つた。」

「この、宝だけは、放さぬと、男はありつたけの力で抱きしめていた。」

「そして――妻が、死んだ。」

・・・・・・・・・・

「嗚呼、わたしには、何もない。この家など・・・ただの大きな箱に過ぎない・・・！」

死神が笑う、嗤う。

「家など燃やして、わたしは、そちらに行きたい！」
男が泣いて、泣いて、嘆いた。

「嗚呼、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、」

何故、わた、しだけ、行けぬ！

死神は睡つ。

・・・・・・・・・・・・

「死神、わたしは全て失った。全てだ、總て。長く暗い年月は自己すらも隠してしまつ、暗い暗い闇色の檻になり、わたしをも、覆い…」

男は、泣いた。

「何故…わたし、わたし、つは…」

「嗚呼、わたしは、わたしは」

『あなた。』

聞き違えるはずがない。

この、優しい子守唄のよつな音で話す女性を知つている。

「か、れ…ん…？」

何年も発していなかつた単語なのな、スッと口をついた。

『あなた…わたしは、幸せなのです。あなたと、出会えたことが。子供達と過ごせた日々が。』

ああ、だからどうか。

なかつたことに、しないで。

「かれん…」

男の目に、透明の液が溢れた。

男が死を憎み畏れなかつた心が、死を初めて畏れたのだ。

死神は、軽く笑んで、鎌を、ふるつた。

仮面が剥がれた死神のその顔は彼が生涯愛した人のものであつた。

(後書き)

語ぬことはなにもないです。

あ、誤字脱字とかコメントとか下せーねー！

お待ちしております。（切実ッ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602m/>

死神と人間

2011年1月3日23時10分発行